

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山大念寺  
住職 大島祥明



葬儀の本質は、「本人」に  
死んだことを悟らせることにある

僧侶の執り行う読経や作法というのは、遺体のすぐそばにいますであろう「本人」に対して「あなたは亡くなったのですよ」と、繰り返し繰り返し教えることなのです。

そういう全体の様子を見て「本人」は、

——ああ、自分は死んだのかもしれない。

——どうも死んだようだ。そうか、死んだのだ。

と次第に悟っていくわけです。

そして、身体があればこそできた諸々のこと、ああしたいこうしたいという物事が、もうできないのだと気づいていくのです。いわゆる俗世の未練が絶ちきれていくわけです。そして、成仏へと

進んでいくわけです。

このように、故人に自分の死を悟らせ、俗世の未練を絶ちきらせていくのが通夜であり、葬儀の本質的な意義なのです。

\* \* \*

死んで、終わりではありません。

殺して、終わりではありません。

死んでも、心は変わりません。

悔いなく、未練なく、恨みなく、恨まれることもなく、生きること。

死んでも、心はいまのまま。

だから、この「いま」が大切なのです。

■大島祥明著『死んだらおしまい、ではなかった』より引用。▽問い合わせ☎03-3239-6221 (PHP研究所書籍第一部)

■1944年大阪市生まれ。仏教大学・同大学院修了(文修)、浄土宗僧正。87年12月、船橋市上山町に大念寺開山。08年5月、同市馬込町に新寺移転。